信州大学 SHINSHU UNIVERSITY 教育学部 附属長野小学校

１年１組

くらしの中から
～もっと仲良くなりたい　よもぎとわたし～

1ねん1くみ　よもぎけんきゅうじょ

もっとよもぎを感じ、よもぎとの距離を縮めたいと願う子どもたち。それぞれに「今日のわたしの研究」を追究しています。

「先生、よもぎ取りに行こう」と言って虫メガネを片手に外に出ていくAさん。この日、Aさんと一緒によもぎの活動を共にして、気づいたことがたくさんありました。Aさんは、「まずは観察して、においが良かったら、取る！」と言って、よもぎの葉を取っては鼻にくっつけ、空気を思いっきり吸いながら葉っぱのにおいを嗅ぎます。また、大きい葉のよもぎと、小さい葉のよもぎの匂いを比べて、「これ、においがいいね」と言って、小さい葉のよもぎをポケットに閉まいます。Bさんは「わたしさ発見したんだけど、よもぎはさ、一人ぼっちじゃない。みんなと一緒に、一緒のところで生えてる」と、よもぎの生え方に注目していきます。そんなBさんの発見を聴いたAさんは、「待って待って、よもぎの種ってあるの。どうやってよもぎはさ、出て来たんだろう」「もしかしてさ、種を蒔かないで草の力でよもぎは出て来たんじゃない」と話し始めます。そこにCさんがやってきて、「僕気づいたんだよ、よもぎは小さいほうが苦くて、大きいほうが味が薄い。よもぎは小さければ小さいほど味が濃いよ」と伝えに来ます。Aさんは「じゃあ僕もよもぎ食べてみるよ」と言うと、しばらく噛んで、べーっと吐き出し、「苦いです！このまま食べると苦いので、このまま食べるのは注意してください」と叫びます。Dさんは「今日は学校のいろんな場所のよもぎを食べ比べる」と言って大池や岩山、畑のよもぎを食べ比べ、「大池の近くのよもぎは苦いけど、畑のよもぎは甘い」と言って、場所による味の違いを感じていました。この時間Aさんは、場所を変えながら、そこに生えるよもぎを観察して回り、そこで研究している友だちの話を聞きながら、時間いっぱいよもぎを感じていました。また、振り返りでは「よもぎの仲間は白と黄色の花が生えるらしいから、次は花を見つけて確かめてみたい」と語っていました。

Aさんの、ただよもぎを取って集めるのではなく、1枚1枚匂いを嗅いで匂いの濃いよもぎだけを集めている姿。これはよもぎの持つ、においの特徴を大事に受け取って、感じようとしている姿ではないかと思います。Bさんは、「今日はどんな発見があるかな」と見ようとするから、今まで当たり前に生えていたよもぎの生え方に疑問を抱き始めます。CさんやDさんは、感じようとするからこそ分かってくる味の違いを表現しています。よもぎを触って、匂って、食べて、よーく見て、発見や問いが増えていく子どもたちは、よもぎを感じ、よもぎとわたしの距離を縮めようとしています。また、子どもたちは、それぞれよもぎへの「わたしの問い」があるからこそ、よもぎを別の視点で研究している友だちと自然に繋がっていきます。よもぎへ親しみを持ち、生活を楽しくしていこうとする者同士だからこそ、響き合えるのだと思います。

「よもぎはぼくの相棒だからね」

普段から五感を使ってよもぎから様々なことを受け取り、よもぎの研究を進めている子どもたち。そんな子どもたちに今回わたしが届けたのは、立命館大学の田中謙先生が発見した、「よもぎのにおいは幸福感を刺激する」という研究結果です。この研究結果に出合った子どもたちは、今まで自分が感じてきたことを「やっぱりか」と確かめていったり、さらに感覚を研ぎ澄ましながらよもぎの研究を進めていくのではないかと考えていました。実際、この言葉を子どもたちに届けると、Aさんはすぐに、「ああ、だからよもぎだんご美味しかったのか」とつぶやきました。そして、活動が始まると、よもぎがたくさん生えている畑に走っていき、「これをみんなにあげるんだ」と言いながら、たくさんのよもぎを根っ

こごと集めていました。Aさんがどうして友だちによもぎをあげたくなったのか考えながら、わたしも一緒によもぎを取り、「Aくん、この大きい緑のよもぎ（を取るのは）どう」と聞きました。するとAさんは、「先生、僕はね、枯れちゃったよもぎも大事なんだよ。だって、よもぎは僕の相棒だからね」と言葉が返ってきました。大きくて青々としているよもぎを「良いよもぎ」として見ていたわたしに気づかされると共に、どんな姿になったよもぎも「大事なよもぎ」として見ているAさんの姿に、ただただ、「すごいな」と嬉しさを感じながら、一緒に活動していました。教室に戻ると、Aさんは、「僕のよもぎ欲しい人は集まって！」と友だちに呼びかけ、じゃんけん大会が始まりました。そして、Aさんは、「先生、これはEくんと、Fくんと、僕のよもぎカップ」「今日からは3人のよもぎカップだね」と言って、取って来たよもぎを嬉しそうに水に生けていました。

Aさんが飾った、「Eくんと、Fくんと、僕のよもぎカップ」の隣には、もうひとつ、以前にAさんが取って生けていたよもぎカップが置いてあります。以前から生けてあるよもぎをAさんが取って来たときは、Aさんは根っこごと取れた嬉しさを感じながら、「僕のよもぎ」として教室に持って帰ってきました。しかし、今回教室に持ち帰ったよもぎは、Aさんにとって誰かに届けたい、「友だちのためのよもぎ」でした。Aさんは、飾られた３人のよもぎカップを見つめながら、とても嬉しそうにしています。Aさんにとって、よもぎを介して友だちと繋がれた、しあわせな時間になったのではないかと感じ、わたしも嬉しくなりました。わたしは、子どもたちに「よもぎのにおいは幸福感を刺激する」という研究結果を届けましたが、子どもたちは、よもぎのにおいだけでなく、よもぎを介した様々な経験や出来事も含めて幸福感を感じている、感じて来たのではないかと思いました。

「よもぎはこころで伝えているんだね」

前時の振り返りで、「よもぎのにおいは幸福感を刺激する」という言葉を改めて紹介すると、Gさんが、「僕、なんか、違う気がずる」とつぶやきました。どういうことか尋ねても、「しあわせってさ、、、うーん」と、うまく言葉にならない様子のGさん。「Gさんが伝えようとしている気持ち、分かるなって人いる？」と子どもたちに聞くと、たくさん手が挙がり、子どもたちは自分の思う「しあわせ」を伝えてくれました。

Hさん：「家族といっしょにいるとき」、Iさん：「お友だちにありがとうって言われたとき」、Jさん：「大好きなお友だちと遊べたとき」、Kさん：「お友だちが助けてくれたとき」、Lさん：「お誕生日プレゼントをもらったとき」、Mさん：「目標を達成できたとき」 など、様々です。 そして、でもやっぱり、「よもぎのにおいがしあわせな気持ちもわかる」とたくさんの子どもたちが伝えてくれました。すると、Nさんが、「よもぎはこころでしあわせを伝えてるんじゃない」とお話してくれました。「どういうこと？」と聞くと、「よもぎのこころに『しあわせ』があるから、触ったりしてさ、わたしたちもしあわせになるんじゃない」と熱く語ります。すると、周りの子どもたちも、「におったり」「食べたり」「取ったり」「パウダーにしたり」「実験したり」と続き、よもぎはにおいをかいだ時以外にもしあわせを感じていることを教えてくれました。

Aさんは、「よもぎのにおいをかいだらお勉強がんばれる気持ちになる」と語ります。この言葉を聞いて、本当に見つめているものがわたしにとって対象になっているからこそ、対象を通した自分自身への気づきが生れてくるのだと感じました。きっとAさんはそんなつもりで言っていないかもしれませんが、この言葉の裏には、勉強に集中できない時がある自分も分かりながら、それでも、今よもぎを通して目一杯頑張れている自分、こんなにも多くの発見ができる自分にも気付いている、そういった自分を全部受け止めながら発している言葉のように感じました。子どもたちは、「わたしが感じる」ことが「納得」に繋がっているのだと、いつも姿で教えてくれます。よもぎに働きかけ、働き返され、「わたしが感じる」ことで、からだを通した学びになっています。これからも、子どもが対象に働きかけ働き返される時に表れる、子どもの行為、つぶやき、表情などから子どもの内面を捉え、意味づけたり、価値づけたりしながら、「わたしがわたしとしていられる場所」を子どもと共につくり続けていきたいと思います。